

“The Birthplace” について ヘンリー・ジェームズとカウンターツーリズム

大穀 剛一

ヘンリー・ジェームズ後期の短編小説 “The Birthplace” (1903) の特に結末の部分について、作品の背景になっている 18 世紀から大衆化されてきたツーリズムと、やはり同時期に盛り上がりを見せたシェイクスピア賞賛 Bardolatry に見られるような実体の乏しい文芸熱について、ジェームズがどのような態度を取り、作品に反映させたかを考察した。その際「カウンターツーリズム」という作業概念を用い、この作品をジェームズの他の作品群の中に位置づけつつ解釈する方法を取った。

キーワード：Henry James, ツーリズム, シェイクスピア, 伝記, 大衆化

ヘンリー・ジェームズ (Henry James) 後期の短編小説 “The Birthplace” (1903) は、18 世紀から大衆化されてきたツーリズムと、やはり同時期に盛り上がりを見せたシェイクスピア賞賛 Bardolatry に見られるような実体の乏しい文芸熱を背景としている。

主人公の Morris Gedge は過去に私立学校を経営していたがうまく行かず、図書館の司書として勤めていた。そんなとき昔の教え子の父親 Grant-Jackson から、偉大な詩人 明らかにシェイクスピアを指しているが、その名は作中では一度も明らかにされない の生家の管理人兼案内人の口を紹介される。給料はさほどではないものの、生気のない田舎町の図書館に知的な魅力を感じていなかった Morris は、妻とともに意気込んでその仕事に就く。しかし仕事を始めてみると、「生家」は歴史的に確実な裏づけもない「史跡」を観光客向けに飾り立てたものにすぎないことがわかる。それを観光客相手に売り込まなければならない彼は、知的な誠実さと日々の糧を得る仕事の間で板ばさみになってしまう。

Morris は自分に課せられた案内という仕事の不誠実さに納得できず、身が入らない。それが客にも伝わって評判を落とし、やがては Grant-Jackson に譴責されることとなる。困った Morris は、逆に、その「生家」の真正さをおおげさな身振りとともに強調してみせることによって、これまで自分がとっていたネガティブな態度でもなく、妻が行っている雇い主の保存委員会公認の型にはまった解説でもない、「パフォーマンス」を編み出す。これが評判となり、Morris は昇給を得る。

この作品についての評価は後半部で Morris がとった行動をどのように解釈するかによって分かれる。たとえば Alison Booth は、彼が正直さと「威厳」を失い、「檻に閉じ込められた」と見ている (222)。他方 Nakamura は、彼が真実か否かを超越したフィクションによって訪問客を楽しませることができている点に注目している (268)。果たして、彼は大衆に迎合したのであろうか。そうでないとしても、読みは更に少なくとも二つに枝分かれする。Morris は「詩人」の不在に対する否定的な態度を極めたのか、それともなにかポジティブなものに変わったのか。

本論では「カウンターツーリズム」という作業

概念を用いて、この Morris の行為の意味づけを中心に、“The Birthplace” をジェイムズの他の作品群の中に位置づけつつ解釈する方法を探りたい。

I

『創作ノート』の記述によれば、本作の “germ” はシェイクスピアの生地ストラトフォード近くに住む Trevelyans 夫人から聞かされた、すでに大衆的なツーリスト・アトラクションと化していたこの文豪の「生家」の案内人をめぐるエピソードだった。この実話の管理人夫妻は、業務に失望した時点で辞職を選んでいて。しかしジェイムズは、夫婦そろって訪問客の前でその欺瞞を暴露した後で出て行く形にしていた。

There may be something in it -something more, I mean, than the mere facts. I seem to see them -for there is no catastrophe in a simple resignation of the post, turned somehow, by the experience, into strange sceptics, iconoclasts, positive negationists. They are forced over to the opposite extreme and become rank enemies not only of the legend, but of the historic donnee itself. Say they end by denying Shakespeare -say they do it on the spot itself -one day -in the presence of a big, gaping, admiring batch. Then they must go. -THAT seems to be arrangeable, workable -for 6000 words. In fact, nothing more would be -nothing less simple. It's that or nothing. And told impersonally, as an anecdote of them only -not, that is, by my usual narrator-observer -an inevitable much more copious way. (*Notebooks* 195 強調はジェイムズ)

完成したテキストが、ノートに記された執筆計画と異なっている点がいくつかある。計画では夫妻は元になったエピソードと同じく一体となって行動することになっていた。しかし、完成形では、Morris が葛藤するのに対して、妻は与えられた立場から逸れずに仕事をこなしてゆく。また、完成形では、「生家」を運営する「委員会」の Morris に対する圧力が、Grant-Jackson の姿を借りて強調されている。

さらに重要なのは、「これより単純なもの」(現実のエピソードのような結末)も、「これ以上のもの」(作品として完成された結末)も無理だ、とまで述べていたのに、いざ実作となると、前述のように解釈の分かれるような複雑さを持たせている点である。それは、この原案のままでは “they end by denying Shakespeare” を伴ってしまうからではないか。「生家」の真正性はともかく、シェイクスピア自身の文化的価値は否定できない。

ジェイムズのシェイクスピア観は彼の *The Tempest* (1611-12) への序文に表れているといわれる。

The secret that baffles us being the secret of the Man, we know, as I have granted, that we shall never touch the Man directly in the Artist. We stake our hopes thus on indirectness, which may contain possibilities; we take that very truth for our counsel of despair, try to look at it as helpful for the Criticism of the future. [...] The figured tapestry, the long arras that hides him, is always there, with its immensity of surface and its proportionate underside. (*Literary Criticism* 1220)

それは “The Birthplace” においては、Gedge の理解者として配されたアメリカ人旅行者との、次のやりとりの中に表されている。

“It's rather a pity, you know, that He isn't here. I mean as Goethe's at Weimar. For Goethe is at Weimar.”

“Yes, my dear; that's Goethe's bad luck. There he sticks. This man isn't anywhere. I defy you to catch Him.”

“Why not say, beautifully,” the young woman laughed, “that, like the wind, He's everywhere?” It wasn't of course the tone of discussion, it was the tone of joking, though of better joking, Gedge seemed to feel, and more within his own appreciation, than he had ever listened to; and this was precisely why the young man could go on without the effect of irritation, answering his wife but still with eyes for their com-

panion. "I'll be hanged if He's here!" (436)

(伝記的な資料上には)「どこにも存在せず」、(芸術的な価値の保有者としては)「至る所に遍在する」この偉大な詩人を作品の中に「捕らえる」には、つまり、「芸術家」の存在価値が伝記的なものとは別個に存在することを主張するには、ノートに記された二つの形ではいずれにせよ不可能である。それを可能にする方法のヒントはここに描かれている「ジョークの、それもより上質なジョークの調子」なのではないかと思われるのである。本論ではそれに、「カウンターツーリズム」という名を与えることにしたい。

II

カウンターツーリズムは、比較的最近登場した語句である。例えば、観光名所のスナップを撮るのではなく、わざとそれに背を向け、その場から見えるものを撮るのである(Reuter)。いわばツーリズムをポストモダン的にずらしたものといえようが、ポイントは「アンチ」ツーリズムではない、という点である。(その場合 Gedge はソースとなったエピソードの实在の案内人や当初計画されていたような行動をとったであろう。)カウンターツーリズムの基調となっているのはやはり「ジョークの、それもより上質なジョークの調子」にあらわされているようなアイロニーであり、陳腐化したツーリズムに対する批評なのである。

ツーリズムの興隆は 18 世紀からのことであったが、その陳腐化もかなり早かったといわれている。Andrea Zemgulys によれば、シェイクスピアの生家のツーリスト・トラップとしての悪名は、すでに 19 世紀から始まっていたらしい。

In 1847, the house was bought by the Shakespeare Memorial Trust, an organization credited with literally cleaning up Stratford: in 1861, the Trust demolished adjacent buildings that would compromise the site's Tudor style and in 1864 whitewashed from the cottage's walls all *but* the celebrity signatures in the birth room, creating a museal character for the house official, authentic,

and sacral. (246 強調は Zemgulys)

ジェームズも自らのフランス旅行記中、カルカソンヌにあるツーリスト・アトラクションが史跡を改変したものであることの是非について書いている。

[...] One vivid challenge, at any rate, it flings down before you; it calls upon you to make up your mind on the matter of restoration. For myself, I have no hesitation; I prefer in every case the ruined, however ruined, to the reconstructed, however splendid. What is left is more precious than what is added: the one is history, the other is fiction; and I like the former the better of the two, - it is so much more romantic. One is positive, so far as it goes; the other fills up the void with things more dead than the void itself, inasmuch as they have never had life. After that I am free to say that the restoration of Carcassonne is a splendid achievement.

(*Collected Travel Writings* 170)

この引用中の、歴史的遺物の改変に対するジェームズの立場に見られる揺れは、後述するように、ジェームズが計画を変更して結論部を最終的な形にしていったことにつながっている。

また、この施設の案内人の描写は、その熱心な表情が見物客の注目を引いているという点で、“The Birthplace” のクライマックスにおける Morris の描写とのパラレルが窺われる。

The *gardien* was an extraordinarily typical little Frenchman, who struck me even more forcibly than the wonders of the inner enceinte; [...] With his diminutive stature and his perpendicular spirit, his flushed face, expressive protuberant eyes, high peremptory voice, extreme volubility, lucidity, and neat-ness of utterance, he reminded me of the gentry who figure in the revolutions of his native land. (*Collected Travel Writings* 167-168 強調はジェームズ)

Mr Hayes of New York had more than once looked at his wife, and Mrs Hayes of New York had more than once looked at her husband -only, up to now, with a stolen glance, with eyes it had not been easy to detach from the remarkable countenance by the aid of which their entertainer held them. (452)

更に次の引用における「講演」は

This brilliant, this suggestive warden of Carcassonne marched us about for an hour, haranguing, explaining, illustrating, as he went; it was a complete little lecture, such as might have been delivered at the Lowell Institute, [...] (Collected Travel Writings 168)

「説教」に置き換えられるであろう

Morris Gedge went on, insisting as solemnly and softly, for his bewildered hearers, as over a pulpit-edge [...] (451)

しかし、そのような情熱的な説教のような案内は、ツーリズムという産業システムの一環として発達した近代の事象の枠組みの中で捉えられるものである。

The little custodian dismissed us at last, after having, as usual, inducted us into the inevitable repository of photographs. These photographs are a great nuisance, all over the Midi. They are exceedingly bad, for the most part; and the worst those in the form of the hideous little *album-panorama* - are thrust upon you at every turn. They are a kind of tax that you must pay; the best way is to pay to be let off. It was not to be denied that there was a relief in separating from our accomplished guide, whose manner of imparting information reminded me of the energetic process by which I have seen mineral waters bottled. (*Collected Travel Writings* 170 強調はジェイムズ)

「説明の仕方」が「ミネラルウォーターの瓶詰の工程」になぞらえられている様子に注目したい。ジェイムズは、小説の中でも、現代の生活が産業主義に侵食されている様子を、機械やビジネスの硬直したイメージを用いてアイロニカルに描くことがあり、じっさい“ The Birthplace ”においても訪問客への対応を“ the smoothly-working mill ”になぞらえている(423)。Grant-Jackson に代表される「委員会」から Morris が求められていたのも、これと同じ硬直性であった。上記の引用でジェイムズはアイロニーをカルカソンの案内人のこの点に向けており、それがカウンターツーリズムとしての批評性となっている。“ The Birthplace ”では、案内人の Morris が、最後の“ haranguing, explaining, illustrating ”において、自らの機械的な硬直性にその批評を向けている。

III

先述のように、Morris の最後の長広舌については、解釈が分かれている。これがなぜツーリズムへの妥協ではなくカウンターツーリズムであると読みうるのか。歴史的遺物の改変に対するジェイムズの立場に見られるような揺れが、執筆計画を変更して結論部を最終的な形にしていっただことにつながっているのではないかと予測しておいた。最初の執筆計画からのズレや他の作品との関連性をヒントとして読み解きたい。

Morris がカウンターツーリズムとしての批評性を持ちうるのは、彼が何らかの弱者であった場合のみである。その点で指摘できるのは、彼は *The Ambassadors* (1903) の Strether や “ The Turn of the Screw ” (1897) の女家庭教師と同様、雇い主からその権力を委託され派遣された代理人にすぎないことである。彼らはみな、任地に着いた当初の意気込みもあらばこそ、次第に現地の実情を知り、自分に与えられた役割との齟齬に悩むことになる。彼らはその矛盾の解消を、Strether の場合には傍目には中年男の気の迷いとしか見られないような「寄り道」によって、女家庭教師の場合にはやはり周囲からは発狂したと思われるような「亡霊」との戦いによって、解消しようとする。ただ、Morris に関して異なっているのは、彼が感じてい

る「生家」が歴史的事実の裏づけに乏しい空虚な場所であることは、おそらく“ They ” 「委員会」であれ「見物客」であれ にも共有されているらしいことである。つまり、女家庭教師が亡霊を指差して見せたように、じつは誰もが暗黙のうちに知っている「生家」の欺瞞を正面から指摘することには意味がない。だからこそ、アイロニカルな表現が必要とされるのである。次の、Morris が案内人として名をなす原因となった、彼の解説振りを分析してみよう。

“ We stand here, you see, in the old living-room, happily still to be reconstructed in the mind's eye, in spite of the havoc of time, which we have fortunately, of late years, been able to arrest. It was of course rude and humble, but it must have been snug and quaint, and we have at least the pleasure of knowing that the tradition in respect to the features that do remain is delightfully uninterrupted. [...] ” (450)

この“ the old living-room ” は、*改変されたのか* (“reconstructed” “the havoc of time”), *されていないのか* (“able to arrest” “the tradition” “do remain” “uninterrupted”) が擬似的な否定的表現 (“happily still to be reconstructed”) やオキシモロン (“It was of course rude and humble, but it must have been snug and quaint”) を解して繋がっているため、史跡の改変について話者がどのような価値を支持しているのかが掴みにくくなっている。

そしてリアリズム ここでのリアリズムとは現実そのものではなく、現実感を出す技法のことである。

“ Across that threshold He habitually passed; through those low windows, in childhood, He peered out into the world that He was to make so much happier by the gift of it of His genius; over the boards of this floor -that is over some of them, for we mustn't be carried away! -his little feet often pattered; and the beams of this ceiling (we must really in some places take care of our heads!) he

endeavoured, in boyish strife, to jump up and touch. ” [...] (450-451)

「彼」の實在の名残が、「生家」の物質性 (“that threshold” “those low windows” “the boards of this floor” “the beams of this ceiling”), そして見物客の肉体性 (“we must really in some places take care of our heads!”) に結び付けて表現されているのだが、一方では見物客の妄想の過熱をいましめ、「もっともらしさ」を演出してもいる (“we mustn't be carried away!”)

そして悼尾は、リアリズムから、神格を思わせる大文字の“ He ” に対する身体動作を伴った (“with an uncompromising dig of his heel”), 宗教儀式的なパフォーマンスへの揺れである。

“ I'm not suggesting that He was born on the bare ground. He was born here! ” -with an uncompromising dig of his heel. “ There ought to be a brass, with an inscription, let in. ” “ Into the floor? ” -it always came. “ Birth and burial: seedtime, summer, autumn! ” -that always, with its special, right cadence, thanks to his unflinching spring, came too.

(455)

この揺れのアイロニーが有効となるには、第三者の意識の、肯定的・否定的という二種類の鏡によって映し出されなければならない。それが、ソースでは登場しなかった妻の Isabel と、アメリカ人観光客の Hayes 夫妻との、微妙な立場の違いである。このような登場人物の組み合わせは、ジェイムズのストック・キャラクターといっても良いだろう。たとえば The Ambassadors においては Strether の変心は Maria Gostrey によって肯定的に評価される一方で、Waymarsh には咎められる。読者は二つの見方を往復しながら、Strether の心理の嬖を押し量ることになる。

Isabel にとって、夫の変化は新たな心配の種に過ぎない。

She had had her bad moments, he knew, after taking the measure of his new direction -moments of readjusted suspicion in which she wondered if he

had not simply embraced another, a different perversity. There would be more than one fashion of giving away the show, and wasn't this perhaps a question of giving it away by excess? (453)

しかし Mr. Hayes にとっては, Morris は一度目の訪問の際とはまた別の頂点に立っていることになる。

“ Ah, but my dear man, ” her husband interposed, “ you're not down; you're up! You're only up a different tree, but you're up at the tip-top. ” (459)

この “ different ” は Hayes 夫妻の最初の訪問のときに彼らが立っていた共通の立場から Morris が変化したことを表している。Zemgulys の表現を借りれば (253), ここで Morris は Hayes 夫妻の単純な懐疑主義以上の批評的地点に立っているのである。Morris の立場は妻のものとは異なっているのはもちろん, 「単に」「別の倒錯」にしがみついているのでもない。“ by excess ” という数量的な問題ではなく, 質の問題なのである。

IV

Nakamura は Morris をフィクションの作り手になぞらえ, 次のように論じている。

To become lost in reading a story is to enter a world of special reality. It is experience above the question of whether it is true or false. The tourists who heard Gedge talk eloquently must had such experience, too. (268)

その「経験」はこのあと Nakamura が続けて述べ

ているように “ pleasure ” でもあり, Tony Tanner が James を引きつつ論じているように詩人のアイデンティに対する間接的な “ a final piecing, penetrating, all-exposing thrust ” (92) なのかもしれない。ジェイムズにとってカウンターツーリズムとは, ツーリスト・トラップの抱える「不在の中心」に「遍在」する詩人を読み込むための, 意図的な誤読なのだ。

引用文献等

- James, Henry. “ The Birthplace. ” *The Complete Tales of Henry James* 11. Ed. Leon Edel. London: Rupert Hart-Davis, 1964.
- . *The Complete Notebooks of Henry James*. Eds. Leon Edel and Lyall H. Powers. Oxford: Oxford UP, 1987.
- . “ A Little Tour in France. ” *Collected Travel Writings: The Continent*. Literary Classics of the United States. NY. 1993.
- . “ Introduction to The Tempest. ” *Literary Criticism*. Literary Classics of the United States. NY. 1993
- Booth, Alison. “ The Real Right Place of Henry James: Homes and Haunts. ” *Henry James Review* 25 (2004).
- Nakamura, Yoshio. “ The Significance of Fiction in Henry James ’s “ The Birthplace ”. ” 『英文学研究』 Vol.66, No.2 (1990).
- Reuter. “ Experimental tourism catches on ”. CNN.com/Travel <<http://www.cnn.com/2003/TRAVEL/09/01/experimental.tourism.reut/index.html>> September 1, 2003
- Tanner, Tony. “ The Birthplace. ” *Henry James: The Shorter Fiction, Reassessments*. Ed. H. N. Reeve. New York: St. Martin ’s, 1997.
- Zemgulys, Andrea. “ The Birthplace ” in Context. ” *Henry James Review* 29 (2008).
-
- (2009.3.27 受付 2009.5.20 受理)